

静岡新聞 2024 年 4 月 4 日 付

論壇

東京大名誉教授(国際経済学)

伊藤 元重

AI(人工知能)の技術革新のスピードは、私たちの職場を大きく変えようとしている。AIの利用拡大によって多くの事務職の仕事が奪われる、という悲観論がある。一方で、AIやロボットの活用によって、労働力の不足を補うことができる、という楽観論もある。

大きな技術革新が人々の生活にどのような影響を及ぼすのかを考えるためには、過去の歴史が参考になる。18世紀の後半に英国で起きた産業革命で、それまで肉体力労働に頼っていた仕事の多くが蒸気機関や自動織機に置き換わった。産業革命によって経済成長率は高まったが、その利益の大半は資本家の手元に入った。機械に仕事を奪われた労働者の所得は減少するばかりであった。産業革命が始まってから50年近くの間、労働者

技術革新がもたらす影響

の取り分は減る一方であった。

ただ、そうした流れは次第に変化していった。労働者が機械を活用することが増えることで、労働の生産性を高めることができ、労働者の所得が増え始めたのだ。産業革命の初期には新しい技術は労働者にとって敵であったが、次第に新しい技術が労働者の味方になっていったのだ。労働者にとって自分の肉体力だけに頼るのではなく、機械を利用した方が、何倍もの成果を上げられるからだ。

AIについても同じようなことが言える。AIの技術が進めば、多くの人がAIに仕事を奪われることだろう。その意味では、AIは労働者にとって敵である。ただ、AIが人間のやることを全て代わりにやってくれるわけではない。AIにできないことをできる人間が、AIを活用すれば、これまでの何倍もの生産性をあげることができる。つまりAIを味方につけることができれば、労働者の生産性や所得も大幅に増えるはずだ。

上げる要因となる。社会全体としてはこの両面を活用して、一方で労働力不足への対応策としながら、他方で労働者の利益を守ることができ

る。こうした動きを進める上で鍵となるのは、社会全体としてAIの技術を受け入れていくことである。AIに仕事を奪われるのではなく、AIを活用することで仕事の機会を増やすことだ。AIの技術はその先端部分は高度な技術的要素が強く、先端技術を備えた企業でないと対応できないだろう。ただ、AIの活用が広がれば、誰でもスマホなどを通じて利用できることが増えていく。AI技術と労働力の補完的な面を広げていくためには、より多くの人がAIを利用するような社会となる必要がある。

18世紀後半では、産業革命が労働者に利益をもたらすのに50年近くかかったと言った。労働者が機械を利用する補完性を引き出すのに50年近くかかったということだ。21世紀の技術革新であるAIのようなデジタル技術では、変化のスピードはもっと速い。その変化のスピードを速めるためにも、より多くの人がデジタル技術を利用できる流れを加速化する必要があ

る。経済学の用語を使えば、AIは労働者にとって代替的な面と補完的な面がある。代替的な面ではAIの進歩は雇用を減らす要因となるが、補完的な面では労働者の生産性を